
愛するが故に

ともゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛するが故に

【Nコード】
N8750L

【作者名】
ともゆき

【あらすじ】
「ヨーコを殺す」：予告状が送られた中、厳重警戒の中で行われる沖野ヨーコのコンサート。果たしてコナンたちは、彼女を魔の手から守れるのか？

・プロローグ

あるアパートの一室。

その部屋には部屋の中には不釣り合いと思えるほどの大画面のテレビが置いてあった。

そして一人の男がじっとテレビの画面を見つめていた。

男の視線の先には一人の女性アイドル歌手の姿が映っていた。

彼女が歌い終わると男はビデオのリモコンを片手に「巻戻し」のボタンを押す。

再び彼女が歌い始める場面から始まった。

その姿を見て男はニヤリと薄笑いを浮かべた。

＊

それと同じ頃、円谷家の居間。

その一角にある大画面のハイビジョンテレビにサッカーゲームの画面が映っていた。

そして2～3メートル離れたソファにテレビに接続されているゲーム機を前にして、5人の子供が座っていた。

その中にいる2人の少年——江戸川コナンと小嶋元太がコントローラーを手に使っていた。

そう、今この二人はサッカーゲームで対決をしているのだ。

「よし、クロスをあげて…、シュート！」

コナンが巧みなコントローラー操作でゴールにボールを叩き込む。「あっ、やられた！」

元太が叫ぶと「3ー1」というスコアが画面に表示される。

そしてゲームは再び始まったが、程なくホイッスルの音が流れ、ゲームがそのまま終了となった。

「ああ、またやられたぜ。ほんとにコナンには勝てねえなあ」

元太が言うと、それを見ていた吉田歩美が、

「ホント、コナン君ってゲームの中でもサッカー上手だね」

（…まあ、オレも結構サッカーゲームはやっているからな。もっとも、オレは本当は実際にやる方が好きなんだけれどな）

コナンがそう思っていると、灰原哀が、

「でも小嶋君も確実に腕が上がっているんじゃない？ 以前は5対0とか7対1の試合が普通だったのに、最近はなかなかいい勝負しているし」

「まあ、コナン君が相手じゃ否が応でも腕が上がりますよ」
この家に住んでいる円谷光彦が言う。

＊

元太が何の気になしに部屋の時計を見る。

「あれ、もうこんな時間かよ。そろそろ帰らなきゃ」

元太の言葉が合図になったかのように、彼らは立ち上がると、ゲーム機とテレビの電源を切り、ゲーム機を片付ける。

「じゃあな、光彦」

「あ、そこまで送りますよ」

円谷光彦はそう言うほかの4人と共に玄関に向かった。

＊

「それにしても…」

光彦がつぶやいた。

「どうしたの、光彦君？」

歩美が聞く。

「他の人もゲーム機は持っているのに、何でみんなボクの家でゲームやりたがるんですか？」

「決まってるじゃねえか。光彦ん家のテレビの画面がデカいからだよ。オレン家なんか光彦の家のテレビの半分の大きさもねえぜ」

元太が言う。

「それだけの理由なんですか？」

「でもそれだけ画面が大きいと、迫力が違うんじゃないの？」

「：確かにそうですね。スポーツや映画なんか見ても全然違いますもの。今度みんなと一緒にブルーレイディスクで映画でも見ましようよ」

：と、不意に光彦の足が止まった。

「？ どうしたの、光彦君」

歩美が聞く。

「：あれ？ 珍しいですね」

光彦が言う。

「珍しい？」

コナンが聞く。

「：あの人が見てください」

光彦が指差す方向を見るとバッグのようなものを持った一人の男がアパートの階段を下りていくところだった。

「あの人がどうかしたのか？」

コナンが聞く。

「いえ、あの人がこの時間に出歩いているなんて珍しいな、って」

「珍しい？」

「ええ、なんでも今は仕事を探している、とか言う人なんですけれど、近所づきあいがない人なんですよね」

「ふーん」

「聞いた話なんですけれど、仕事探している割にはハローワークなんかに行っているところを見た人が少なくて、何でも毎日のようにアパートに閉じこもってビデオばかり見ている、という話を聞いたことがあるんですよ」

「なに、それ。気持ち悪い」

歩美が言うと、

「：そうですね。ですからボクもちょっと気味が悪くて」

「：それじゃあればレンタルDVDでも返しに行くところなのかな？」

コナンが言う。

「そうかもしれないですね」

＊

「ただいま」

ドアを開けると、毛利蘭がコナンを出迎えた。

「お帰りなさい、コナン君。すぐ御飯にするからね」

「え？　こんな時間にもう？」

「うん。何でもお父さん、7時からヨーコさんが生放送で出る番組
見るからって、夕飯を早くしてくれ、って言うのよ」

「ハハハ…」

それを聞いて思わず苦笑するコナン。

そう、アイドル歌手・沖野ヨーコの大ファンである小五郎はこう
いったようにヨーコが出る番組は欠かさずにチェックしているのだ
った。

＊

そして夜7時を過ぎ、沖野ヨーコが出ると言う生放送の番組が始
まった。

小五郎は早くもテレビの前で釘付けである。

「…そういえば」

蘭がテレビを見てつぶやいた。

「どうしたの、蘭ねーちゃん」

「ん？　このテレビも買ってだいぶ経ってるから、お父さんがそ
ろそろこの事務所のテレビを地デジ対応のテレビに買い換えるか、
なんて言ってたこと思い出して」

（…そういえばそうだったな。この間、電器店に行った時におっち
ゃん、地デジ対応テレビのカタログ貰っていたしな）

「…でもこの家じゃ、光彦や園子ねーちゃんの家にあるような大画
面のテレビを買っても仕方ないんじゃない？」

「そうかもね。そんなの買ったら部屋の端において台所辺りから見
なきゃ」

蘭の言葉に思わず苦笑するコナン。と、

「おまえら、ヨーコちゃんが出てるんだから少し静かにしろ！」
小五郎だった。

＊

それと同じ頃。

アパートの一室で一人の男がテレビを見ていた。

その画面の奥には沖野ヨーコの姿があった。

そして、男の視線はテレビの中の沖野ヨーコの姿をしっかりと
らえていた。

男は何も言わずにじっと画面を見ていた。

やがてヨーコの出番が終わると男はテレビの画面を消してしまっ
た。

そしてテーブルに置いてある一枚のチケットに目を落とす。

「沖野ヨーコ CONCERT TOUR FINAL」とそのチ
ケットには書かれてあった。

「…ヨーコ…」

男がぼそつと呟いた。

「…必ず、お前をオレ一人のものにしてやる…」

（本編に続く）

・プロローグ（後書き）

（作者より）この作品に対する感想等がありましたら「ともゆきのホームページ」BBS（<http://www5e.biglobe.ne.jp/~t-azuma/bbs-chui.htm>）の方にお願ひします

・第1話

大阪のあるコンサート会場。

「みんな、どうもありがとう。またお逢いしましょう！」
沖野ヨーコが会場を埋め尽くした大勢のファンに向かって手を振る。

全国各地を回ったコンサートツアーも全国各地で満員の観客を集め、いよいよ大詰め。残すは3日後の東京に戻ってのファイナルコンサートだけとなった。

＊

そしてヨーコが舞台の袖から通路に入る。

「お疲れ様でした」

そう言いながらヨーコは周りのスタッフにねぎらいの言葉をかける。と、

「ヨーコ、お疲れさん」

彼女のマネージャーである山岸栄一が出迎えた。

「疲れたろう？」

「いえ、平気ですよ。このままもうワンステージやりたいくらいです」

それを聞いた山岸はヨーコに笑いかける。

彼女は意外と芯の強いところがあるのか、人前では決して「疲れた」とかそういったことは決して言わないのだ。

「そうか。まあ、とにかく控室に戻りなよ」

「はい」

そしてヨーコが控室に向かって歩き出したときだった。

「…！」

山岸の胸ポケットに入れてある携帯電話が振動する。

「ちよっとごめん」

山岸はそう断ると携帯電話を取り出す。

「もしもし、山岸だけど」

と、いきなり山岸の顔色が変わった。

「え？」

「…どうしたんですか、山岸さん？」

ヨーコが聞く。

「い、いや、なんでもないよ。ヨーコは先に控室に戻ってて」

「さ、ヨーコちゃん、行こう」

そしてスタッフや付き人に付き添われてヨーコは控室に戻った。

ヨーコは一体なぜ自分のマネージャーである山岸があんな顔をしたのか理解できなかった。

＊

そして翌日。

東京に向かう新幹線が新大阪駅を出発した。

そのグリーン車にヨーコと山岸が並んで座っていた。

その周りにはヨーコのスタッフが座っている。

「それじゃ山岸さん、ごめんなさい」

「いいよ。着いたら起こしてあげるからゆっくり休みな」

山岸がそう言うのとヨーコの付き人である少女が鞆の中から薄手の毛布を取り出し、ヨーコにそっとかける。

「有難うね」

そう言うのとヨーコはリクライニングシートを倒す。

沖野ヨーコのような人気アイドルともなると、仕事に追われてなかなか睡眠時間も取れないから、こういった交通機関を使った移動時間は睡眠をとるのに貴重な時間なのだ。

新大阪から東京までは2時間半ちょっとだから十分に睡眠が取れるであろう。

程なくヨーコの寝息が聞こえてきた。

それを確認した山岸は近くの席に座っていたスタッフに、

「ちょっとヨーコのこと頼むよ」

そう小声で言うのとそつと席を離れ、車両のデッキに立った。

そして携帯電話を取り出すとメモリーを呼び出す。

「…もしもし、山岸だけど。例の件どうなった？ …うん、うん。

そうだよなあ、困ったことになったよなあ。…うん。とにかく事務所に戻ったらそのことについて詳しく聞くから。大丈夫、まだヨーコには話してないから。それじゃついたら連絡するから」

そして携帯電話を切ると、大きくため息をついた。

そして自分の席に戻ると、スタッフの一人が、

「…例の件ですか？」

「うん。社長の方も心配しているみたいで東京に戻ったら緊急の会議をやるから僕にも出てくれ、って言ってたって」

「それで、他に社長はなんか言ってたんですか？」

「いや、とにかくみんなは心配しなくていいからコンサートの準備を進めてくれ、って。明後日はツアーの最後を飾る大切なコンサートなんだから、今はそっちの方に全力投球をしてくれ、ってさ」

「…わかりました」

そして新幹線が東京駅に到着し、中からヨーコをはじめとしたスタッフが降りてくる。

「それじゃ、僕はヨーコを送ってから事務所に行くから、君たちは先に戻ってて」

山岸はそう言うのとタクシーを拾って二人で乗り込んだ。

＊

「あ、この辺で御願います」

そしてタクシーが停まる。

ここから歩いて数分のところにヨーコが住んでいるマンションがあるのだが、さすがに彼女の住んでいるところは一部の者しか知らないから、その近くで停めることにしているのだ。

そしてヨーコがタクシーから降りた。

「それじゃ、ありがとうございます」

「うん。明日はリハーサルが早いから今日はゆっくり休みなよ」

「はい」

そしてドアが閉まり、ヨーコが歩き去っていく。

その背中を見ていた山岸は運転手の方に向き直ると、

「すみません。それじゃ御願います」

そしてタクシーは走り出した。

＊

その日の夕方。

事務所の会議室には何人かの人間がいた。

「…山岸君、すまん。大阪から返ってきたばかりのところを」
彼の上司であろう、一人の男がねぎらった。

「いえ、いつものことです。それより例の件ですけれど…」

「うん、実はな…」

その時、事務所の内線の電話が鳴った。

一人の男が電話を取ると、

「今、会議中だというのがわかってんのか！」

そう叫ぶが、すぐにその顔色が変わった。

「…何だって？ わかった、つないでくれ。…もしもし、オレだ。

一体どうしたんだ？ …うん、わかった。今替わる。…山岸君、ヨーコからだ」

そう言う受話器を差し出す。

「ヨーコから？」

そう言う山岸は電話を替わる。

「もしもし、どうしたの？ …なんだって？ うん、わかった。すぐ迎えに行くから待っててよ」

そして山岸は電話を切る。

「…ヨーコはなんと言ってるんだ？」

「：例の件で、ヨーコのところにも来たそうです」

「何だって？」

「それで、今からヨーコを迎えに行ってきます。直接彼女から話を聞いた方がいいでしょう」

「：そうだな、それがいいかもしれない」

「それじゃ行ってきます」

「あ、僕も行きます」

そう言う山岸の隣の席に座っていた男が立ち上がった。

「それじゃ、頼むぞ」

「はい」

そして2人の男は会議室を出て行った。

＊

それからほどなくヨーコが山岸たちに連れられて事務所にやってきた。

「まあ、かけなさい」

ヨーコの事務所の社長がそう言ってヨーコに椅子を勧める。

「まずは大阪のコンサート、ご苦労だったね。なんでも今回も超満員だったそうじゃないか」

「ええ、おかげさまで」

「ウチの事務所としても沖野ヨーコの人気の高さがわかってうれしいよ」

と、社長は最初のうちはヨーコに変に身構えさせたらまずいとも思ったのか、今回のコンサートに関していろいろとヨーコに話を聞く。

そしてしばらく経ったとき、

「：ところで連絡のあった例のことだけれど」

「はい。マンションに戻って久しぶりにブログでも書こうかと思つて、パソコンを開いたんです」

最近は自分の意見を気軽に言うことができるから、という事でかブログやツイッターを持っている芸能人が多く、彼女も同じ事務所

にいるタレントの勧めもあって公式のブログを持っていたのだった。
「それで？」

「そうしたらコメント欄にこんなものが…」
そういうとヨーコは一枚のプリントアウトした紙を差し出す。
社長がそれを受け取り、じっと眺める。

「…確か君のブログは私もよく見ているが、コメントやトラックバ
ックは承認制だったね」

「ええ、ですからこのコメントは今の所、他の人の目には触れてい
ないのです…」

「それはある意味でよかったかもしれないな」

そして社長はプリントされた紙をヨーコに返す。

「…いや、実はね。これと同じ内容の分がウチの事務所にも送られ
てきたんだよ」

「本当ですか？」

「ああ、昨日届いたんだけどね」

そういうと社長は開いた封筒を差し出す。

そしてヨーコは封筒を開き、中の紙を取り出す。

「…これは」

ヨーコが絶句する。

「…ああ、君が見せた紙と同じ内容のことが書いてあるよ。実は君
から連絡があるまでは単なるいたずらではないか、という意見もあ
ったんだけどね、ここまで来ると単なるいたずらでは片づけられ
ない問題になったようだな」

「…それで社長はどうしようとお考えなんですか？」

ヨーコが聞くと、

「どうしよう、って決まっているじゃないか。とにかく、警察に連
絡しようと思っているんだ。それから…」

「それから？」

「山岸君が言っていたが、探偵の毛利さんにも頼んだ方がいいな。
今まで何度もお世話になっているし」

＊

毛利探偵事務所。

不意に小五郎が座っている机の上の電話の呼び出し音が鳴った。

「はい、毛利探偵事務所。あ、これはこれは。今日は一体何の用事…、なんですって！」

思わずガタンと音を立てて立ち上がった小五郎に驚いたか、コナ
ンと蘭が小五郎のほうを見る。

「…はい。はい。わかりました。今からそちらへ伺います。…そうですね、いやすみませんなあ。それでは事務所の前で待っています」
そして小五郎が電話を切ると、机に座る。

「…一体どうしたの、も父さん？」

蘭が聞く。

「今ヨーコちゃんの事務所から電話があって、なんでも彼女の住んでいるマンションと事務所に犯行予告とも思える手紙が届いたらしい」

「なんですって？」

「これまでも何度か事件で世話になった、という事でオレに相談したい、とヨーコちゃんが言っている、という事で事務所から迎えに来るらしい。とにかく詳しいことは事務所に行って聞いてみよう」

（第2話に続く）

・第1話（後書き）

（ちよつと言）

最近確かに芸能人がブログやツイッターを開設しているのは事実ですが、こういったようにトラックバックやコメントを承認制にしている方がいるかどうかはちよつとわかりませんが…。

まあ、とにかくこの話ではそういう設定にしている、という事でご理解お願いいたしますm（ ）m。

また、この作品に対する感想等がありましたら「ともゆきのホームページ」<http://www5e.biglobe.ne.jp/~t-azuma/bbs-chui.htm>の方にお願いします。

・第2話

一台のタクシーがあるビルの前に停まった。
中から小五郎たちが出てくる。と、

「あ、毛利さん、お待ちしておりました！」
玄関の前で山岸が小五郎たちを出迎えた。

「それで、我々に話とはどういう事ですか？」

「ここではなんですから、詳しくは会議室で」
そして山岸の案内で小五郎たちは事務所の会議室へと連れて行かれた。

＊

会議室では事務所にいる者が大勢集まっていた。
もちろん、その中には沖野ヨーコの姿もあった。

「…それで、事務所に送られてきた手紙というのは」

初めて会った事務所の社長との名刺交換もそこに済ませて小五郎が聞くと、

「ええ、これなんですが」

そういうと社長は小五郎に何枚かの紙を見せる。

「…これは…」

受け取った紙に書かれている文を見て、思わず小五郎が絶句する。
それを脇から覗き込む蘭とコナン。

「…！」

思わず手で口を覆う蘭。

その紙には、

「今度のツアーのファイナルで沖野ヨーコを殺す」

これだけしか書かれていなかったのだった。

「ヨーコちゃんを殺す…、だと！」

「ええ。これが一昨日の夜に事務所のポストに入っていたんですよ」
「それで、何か手がかりになるようなものは？」

「いえ、封筒には何も書かれていなかったし、消印や切手もなかったからおそらく直接事務所のポストに投函したのではないか、と思うのですよ。実は我々は最初は悪質なはずらなのではないか、と思ったのですが、実はヨーコの公式ブログのコメント欄にも同じような書き込みがあったというのですよ」

そう言うのと事務所の職員がパソコンの画面をプリントアウトしたのであろう紙を小五郎たちに見せる。

「…幸いなことにヨーコのブログは、コメントやトラックバックが承認制なのでまだ誰の目にも触れていないのですが…」

「…それにしてもふざけた野郎だ。それで、事務所としてはどう考えているんですか？」

「どう考えている、って…」

「ヨーコちゃんを殺害する、という手紙がこの事務所に届けられたばかりか、彼女の公式ブログのコメント欄に書き込まれた、となるともうこれは単なるいたずらなんかで片づけられる問題ではないんだ！ …とにかく、これは警察を呼んだほうがいい」

小五郎の声にその場にいた一同が顔を見合わせる。

やがて社長が、

「…そうですね。確かに毛利さんの言うとおりかもしれませんね。

それじゃ、私が警察を呼びます」

「お願いします」

＊

そして事務所の社長の連絡を受けて警察がやってきたのはそれから間もなくだった。

「…これは、間違いなく脅迫ですな」

小五郎から事情を聴き、実際に紙を見せられた目暮警部が言う。

「…しかし、まだこれだけでは何の手掛かりにはなりませんな」

「…そうですね。見たところどこにでもあるパソコンを使ってプリントアウトしたもののようだし」

「…一応本庁のほうでも詳しく調べてもらいますが、その結果が出るのも少々時間がかかるかもしれませんね」

「少々かかる、とは？」

社長が聞く。

「いえ、私もよくわからないのですが、電話の逆探知なんかのように自宅からインターネットに接続していればいいのですが、最近は漫画喫茶などにもパソコンが置いてあるところが多いでしょう？　そこから発信している、という可能性もありますからなあ。そうなる」と聞き込み捜査もしなければいけないわけで…」

「そうですか…」

「とりあえずこれは我々のほうで預かりましょう」

そして目暮警部は部下の警官にその紙を預ける。

「…ところで社長。そのヨーコちゃんのツアーのファイナルはいつ、どこでやるんですか？」

小五郎が聞く。

「ええ。明後日、東都武闘館で午後6時半から始まる予定なんです
が」

「東都武闘館、ですか…。あそこは大学の頃に何回か柔道の大会で行ったことがありますよ。あそこつてもともと名前通り武道の会場なのに、国内外問わず結構使っているミュージシャンが多いんですよ」

「まあ、ミュージシャンにとって武闘館のコンサートというのはある意味で目標の一つですからね。そういう事もあってなかなか予約競争が激しくて…。ヨーコにとっても1年振りの武闘館だし、今回のツアーのファイナルですから何とか成功させたいんですよ」

「…まあ、それはそうですねあ…」

そういうと小五郎は考え込んでしまった。

「どうしたの、お父さん？」

蘭が聞く。

「いや、ちょっとな。これが地方の会場だったらとにかく、武闘館ともなると会場も広いし、警備の人数も相当なはずだろうからな。その合間を縫ってヨーコちゃんを殺す、なんてことができるのか、と思ってな。：それで社長、ちょっとお願いがあるのですが」

「なんですか？」

「明日武闘館へ行ってみていいですか？」

「明日？」

「ええ。会場を見て何かつかめるかもしれないし：」

小五郎の申し出に社長はちょっと考えると、

「：ちょっとよろしいでしょうか？」

「ええ、かまいませんが」

そう言う社長は小五郎たちとは反対側の壁で何人かと話し合いをする。

そして数分後、

「：了解しました、毛利さん。明日、社員を事務所のほうへ迎えに行かせますよ」

「あ、わざわざすみませんなあ」

＊

そして翌日の東都武闘館。

「関係者駐車場入口」と書かれた看板の中に一台のワンボックスカーが入っていく。

そしてある場所に停まると中からコナンたちが下りてきた。

と、小五郎の姿を見つけた社長が小五郎に近づく。

「毛利さん、お待ちしておりました」

「いえ、わざわざすみませんなあ」

するとコナンの視線がある一点で止まった。

「：あれ？」

その声を聴いた小五郎と蘭もコナンの視線の先を見る。

そう、そこには一台の車が止まっていて、中からヨーコが下りてきたのだ。

「…なんでヨーコちゃんまで？」

「ええ。昨日毛利さんたちが帰った後、ヨーコも自分の問題だからどうしても行きたいと言いましたね。もともと彼女のコンサートですし、それにスタッフの打ち合わせやリハーサルもあるし…」

「そうですか…」

するとヨーコのほうでも小五郎に気が付いたか、

「あ、毛利さん。済みません、こんな面倒に巻き込んでしまって…」
「いえ、ヨーコちゃんがこんなことに巻き込まれたとあつてはこちらも黙っていられませんし…。それより、大丈夫ですか？」

「ええ、社長や山岸さんからは『とにかく心配しないで、明日のコンサートだけを考えろ』と言われましたし」

「それならいいんですが…」

(…そうは言っているようだけど、不安は隠せないようだな…)

コナンはヨーコの顔色を見てそう思った。

(…とにかく、何も起こらなけりゃいいんだが…)

と、それを見ていた山岸が、

「ヨーコ、行くよ」

「あ、はい。…それじゃ、毛利さんまた後で」

そしてヨーコは山岸とともに「関係者入口」と書かれたドアから入っていった。

「…それじゃ毛利さん」

そして小五郎たち事務所のスタッフたちとともに中に入っていく。

＊

会場に入ると中では何十人ものスタッフが舞台を組み立てていた。

「すごいもんですなあ…」

辺りを見渡して小五郎が言う。

そう、彼女が立つであろうステージはまだまだ作業途中だとはい

え、いろいろと舞台装置が組み込まれており、かなりの大きさになっているのだった。

そしてアリーナ席の部分には椅子を並べていた。

「ええ。ヨーコのコンサートはいつも満員ですから、準備も大変で……」

社長が言うと小五郎が、

「……それで、今回のコンサートはどのくらいの入場者を見込んでいるんですか？」

「ええ、一応1万人を見込んでいるんですがね」
「1万人？」

「ええ。ここは最大で15000人入れられるんですが、今度のコンサートは正八角形の会場内のうち、3辺をステージに使ってそこに面している座席にはお客は入れませんから、どうしてもそのくらいになっちゃうんですね。まあ、おかげさまで今回のコンサートも前売りは売り切れましたよ。ただ……」

「ただ？」

「……実はまだ今回の件に関しては警察の方や毛利さんを除くと一部の者しか知らないんですよ」

「それはどういう事ですか？」

「我々はギリギリまで今回のコンサートを行う方向で話を進めていきますからね。確かに一部からは中止したほうがいいのではないか、という意見も出たのですが、すでに1年前から予約しているし、関係各位にご迷惑をおかけするわけにもいきませんからね。それに……」
「それに？」

「どうしてもヨーコがやりたい、って言うんですよ」

「ヨーコちゃんが？」

「ヨーコはファンをととても大切にしますからね。我々も最初の内は中止とまではいかなくとも延期しようか、と考えていたんですが『わざわざこの日のために休みを取って見に来てくれた人たちがいるかもしれない。そしてこの機会を逃すともう二度と生の沖野ヨーコ

を見ることができない人もいるかもしれないから、そんな人たちに申し訳がない』と言いましてねえ」

「…ヨーコちゃんがそんなことを言うとはねえ」

「ええ。意外と彼女は芯が強いですから。そうすると我々としてもギリギリのところまで開催、という方向で話を進めなければいけないですよ」

「ふうん…。意外と芸能界というのも大変なところなんですな」

＊

そして彼らは社長の案内で今度は階段で二階席に上がり、そこから会場を見渡す。

「…なんだよ。ここからじゃヨーコちゃんの姿がよく見えないじゃないか」

「でもその分見渡しはいいんじゃないの？」

蘭が言う。

「まあ、確かにな。一体その、脅迫状を送りつけてきたヤツがどういう形でヨーコちゃんを殺そうと考えているのかわからんが、もしライフルが何かで狙撃する、となったらアリーナよりは2階席のほうが危険は少ないからな」

「でも、ライフルで狙撃する、ってのは危険なんじゃない？」

コナンが言う。

「危険だと？」

「うん。だってコンサートの前って所持品検査をするんでしょ？」

コナンがそういうと社長が、

「そう言えばそうだ。カメラなんかを持ち込まれないように所持品検査をやって、持っていた者は一時預かることになってるんですよ」

「…そうでしょ？ カメラならとにかくライフルを持ち込むとしたらゴルフバッグのようなものに入れなきゃいけないし、そんなゴルフバッグみたいなものを背負って入場しようとしたら、誰だって怪しいと思うよ」

「まあ、ライフルはあくまでも可能性の一つだからな。ナイフで刺

すとか、差し入れ品に毒を仕込むとかいろいろ方法はあるはずだし。それこそ小さなナイフだったら所持品検査の際に見落とす可能性だってあるし、毒薬なんかは普通の薬と見分けがつかんし…。いずれにせよ、ヤツがどういった形でヨーコちゃんを狙ってるのかわからないんじゃないかとこっちとしてもどうしようもないからなあ」

そういうと小五郎は腕を組む。

と、そんな時だった。

「お、毛利君も来てたのか」

小五郎の背後で声がして目暮警部が現れた。

「あ、これは警部殿。：それで、何かわかりましたか？」

「いや、警視庁のほうでも捜査は続けているのだが、これといった手掛かりはまだつかめておらんよ。ただ…」

「ただ？」

「今回の一件と直接関係があるかどうかかわからないが、ちょっと気になる事件があつてな」

「気になる事件？」

「うん。おとといの夜のことだったんだが、杯戸町にある銃砲店に何者かが押し入って、ライフルと銃弾が盗まれたそうだ」

「ライフルと銃弾？　だとしたら…」

「いや、まだ詳しいことはわかっておらんよ。今現場周辺で不審な人物いなかったか聞き込み調査を続けておるところだよ。一応今回の事件との関連性は調べておるのだが、彼女の事務所の社長の意向で、今回の脅迫事件に関してはまだマスコミには伏せておるのだよ」

「社長の意向？」

「うん。変に騒がれてコンサートが中止になってしまったら大変だと言っておるのでな。だからこちらとしてもあまりおおっぴらに動けないのだよ」

「うーん…」

「…だとしてもライフルを持ち込むのは難しいんじゃないの？」

コナンが言う。

「持ち込むのは難しいだろ？」

「だってさ……」

とコナンはつい今しがた小五郎に行ったことを繰り返す。

「……うん、確かにそうかもしれないな。とにかく当日は所持品検査をしっかりとやるように社長には頼んでおるのだが……」

「……そうなんですか？」

小五郎が社長に聞く。

「ええ。当日は警備員を増やすことをお願いしているんですが。それと、警部さんとも話し合ったんですが、当日は私服警官も配置をお願いしようか、と」

「その件に関しては社長とも話し合ったよ。何人かの私服警官をよこす方向で話が進んでおるよ。そしてワシが指揮を執る予定だ」

「警部がですか？」

「この事件、ワシが指揮を執ることになっておるからな。もちろん当日はワシも刑事だとは分からない格好でいるつもりだ」

「まあ、確かに何かあったら大変ですからな。……さて、下に降りようか」

小五郎の声を合図にしたかのように全員が1回に降りようとした時だった。

「……？」

コナンが不意にステージのほうを振り返った。

「どうしたの、コナン君？」

蘭が聞く。

「ん？ い、いや、なんでもないよ」

そう言いながらも再びコナンはステージのほうを向く。

（……なんだ、今の視線は？）

そう、コナンは自分たちのことを誰かがじっと見ているような感覚を覚えたのだ。

(第3話に続く)

・第2話（後書き）

（作者より）この作品に対する感想等がありましたら「ともゆきのホームページ」BBS（<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~t-azuma/bbs-chui.htm>）の方をお願いします

・第3話

東都武闘館で感じた「感覚」が一体なんだったのか結局コナンは結論を出すことができず、結局翌日――すなわち沖野ヨーコのコンサートが行われる当日だが――の昼にもう一度集まって話し合う事となった。

ヨーコのコンサートが開始されるのは午後6時からだから、それまでに警備体制などに関しての話し合いに小五郎も参加することになったのだ。

小五郎たちは結局事務所の社員の車の運転で探偵事務所に戻ることになった。

「：コナン君、コナン君？」

コナンに向かって蘭が呼びかける。

「え？ あ、どうしたの、蘭ねーちゃん？」

「こっちがどうしたの、って聞きたいわよ。なんかさっきから考え込んでちゃって：」

「ん？ いや、なんでもないよ」

「そう、それならいいんだけど」

蘭の前ではああ言ったが、コナンは武闘館で感じた「感覚」がどうも気になっていたので。

（：一体なんだったんだ、あの誰かがオレ達のことを睨みつけているような感覚は：）

＊

そして翌日。

コナンたちが朝食を済ませた時に、電話の呼び出し音が鳴り、蘭がそれに出た。

「はい、毛利……。あ、どうしたの？ うん、ちょっと待ってて。コ

ナン君、光彦君から電話よ」

蘭がコナンを呼ぶ。

「あ、ちょっと待ってて」

そしてコナンは電話機の前に来ると、保留状態になっている受話器を取る。

「もしもし」

「あ、コナン君ですか？」

光彦の声が聞こえる。

「光彦か。どうしたんだ？」

「：いえ、ちょっとコナン君に話したいことがあるんですよ。今から米花公園に来てくれませんか？」

＊

米花公園。

「あ、コナン君、待ってました」

公園の門の前で光彦がコナンを出迎えた。

そして二人は公園の一角にあるベンチへと向かう。

そこには既に元太たち3人も集まっていた。

「それで、話ってなんだよ？」

コナンが光彦に聞く。

「いえ、ちょっと最近気になることがありますて：」

「気になること？」

「ええ。この間みんなでボクの家遊びに来たとき、近くのアパートに住んでいるお兄さんのことは話しましたよね？」

「ああ。それは覚えているけど：。それがどうかしたのか？」

「実はここ2、3日朝になるとどこかに出かけて、夕方になると帰ってきてるんですよ」

「：それがどうかしたのか？」

「いえ、それが誰にも言わずにふらっと出て行ってしまいうんですよ。それに：」

「それに？」

「関係あるのかどうかわからないんですが、その、出かけるようになった前の日に何やらゴルフバッグのようなものを担いで帰ってきた次の日に、それを抱えてどこかに行ってしまったんですよね」
「…それってもしかしてゴルフのキャディかなんかのアルバイトじゃないのか？」

元太が言うが、

「でも一日だけゴルフバッグを担いで出ていくなんて不自然ですよ。それにとってもじゃないけれど、これからゴルフに出かけよう、なんて雰囲気じゃありませんでしたよ」

「…雰囲気じゃない？」

コナンが言う。

「ええ。たまたまその日にボク、あの人を見かけたんですけれど、なんだかその、バッグを担いで戻ってきたときも、どこかへ行ってしまったときもなんだか人の目を気にしていたようなんですよね」
「…確かにゴルフに出かけよう、なんて雰囲気には思えないよね」
「ええ。なんだかボクもそれが気になって…」

「…それで、何か他に気が付いたことはないか？」

「…そういえば、関係あるかどうかわかりませんが、杯戸町のライフル盗難事件で警察の人たちが聞き込みに来たんですよね」

「あー、そう言えばあたしの家にも来たわよ」

「オレン家にも来たぜ」

歩美と元太が言う。

「ああ、あの事件か。…それで、どんなこと話したんだい？」

「別にこれと言っては…。歩美ちゃんのほうはどうですか？」

「そうね。杯戸町で目撃者がいなかったから、米花町にまで聞き込みの範囲を広げた、ってことくらいよね」

「まあ、杯戸町は米花町の隣にあるからね。それで犯人の特徴とか、そういったのはわからないの？」

灰原が言う。

「確か盗まれたのが夜中だから、ってことからか、目撃証言が少な

くてまだ詳しいことはわかってない、って言ってたな」

元太が言う。

「そうですね。そのライフルが盗まれた事件から3日経ってますし……」

と、その時だった。

（…待てよ！）

コナンはある可能性に気が付いたのだった。

「どうしたんですか、コナン君？」

光彦が聞く。と、

「光彦、ありがとう。参考になったよ。じゃあな！」

そういうとコナンは駆け出して行った。

「ちょ、ちよつとコナン君！」

光彦が言うがあつという間にコナンの姿は見えなくなっていた。

「…ほんとに時々コナンも分からねえ行動とるよなあ」

「本当ね」

そんな元太たちを灰原は黙って見ているだけだった。

＊

そして昼過ぎのことだった。

東都武闘館の「関係者駐車場」に一台の車が停まった。

中から沖野ヨーコの事務所の社員の運転でやってきた小五郎たちが降りてくる。

「…すげえなあ」

周りを見て小五郎が思わずつぶやく。

そう、駐車場には何台かのパトカーも駐車していたのだった。

そしてそのほかの駐車している車の中にもおそらく覆面パトカーも含まれているであろうことが想像できた。

「あ、毛利さん、お待ちしておりました」

マネージャーの山岸と目暮警部が小五郎たちを出迎えた。

そして小五郎たちが目暮警部に近づこうとしたとき、3人の警察官―一人は女性だったが―が近づくと彼らのボディチェックを始めた。勿論、一人の女性警察官は蘭のボディチェック担当である。

「な、なんですか一体？」

「：毛利君、すまん。気を悪くしないでくれ。たえ誰であろうとボディチェックはしっかりとやってくれ、って事務所の社長に頼まれてな」

そう言っている間に警官たちのボディチェックが終わった。

「：失礼いたしました。どうぞこちらへ」

そして小五郎たちは奥に通される。

「：ヨーコちゃんは？」

小五郎が山岸に聞くと、

「控室にいます」

「：ちよつとあつてもよろしいですか？」

「まあ、毛利さんですからねえ。リハーサルがあるのでちよつとだけなら」

「わかりました」

「沖野ヨーコ控室」と言う紙が貼ってあるドアの前。

小五郎がドアをノックすると、

「はい、開いてますよ」

中からヨーコの声がした。

そして小五郎たちは中に入った。

「あ、毛利さん」

控室の中では、ステージ衣装に着替える前の私服姿で、その上から「STAFF」と書かれたジャンパーを羽織ったヨーコが椅子に座っていた。

「：どうだい？」

小五郎が聞く。

「いえ、あたしは大丈夫です。あたしのステージを見るために1万人の人が集まってくれてるんですから、いつも通りのステージをやるだけですよ。それに…」

「それに？」

「いつもよりちょっと警備の人が多いというだけなんですから、あいつた予告状が来たからどう、ってこともないんですよ」

ヨーコは小五郎に向かって言う。

「…そうか、それならいいんだけど…」

そう言うとき小五郎は黙り込んでしまった。

口ではああ言っているが、心の中では彼女は自分と同じくらい、いやそれ以上に不安を感じているであろうことが、彼女の表情が読み取れたからだ。

それは小五郎の両隣りにいるコナンも蘭も感じていた。

そして彼らは事件のことを少しでも忘れようとしてのか、しばらくの間は事件と関係ない世間話をしていたのだが、どこか身に入らないのか話も思ったほどにはずまなかった。

…と、不意に時計を見ていた山岸が、

「…あの、毛利さんそろそろリハーサルが始まりますので」

「…あ、そうか。ゴメンな、長居しちゃって」

「いえ。かまいませんよ」

そして小五郎たちが控室を出ると、目暮警部がそこに立っていた。

「…どうだった？」

「思っていた通り、ちょっと不安げな表情でしたな」

「そうか」

目暮警部はそれだけ言うと、傍らにいた私服姿の警官たちに、

「いいか、これからリハーサルが始まるが、リハーサルだからと言って安心はできないからな。会場内に不審人物や不審物がないか注意して、何かあったらすぐにワシのほうに連絡するんだぞ」

「はい！」

「よし、それでは全員持ち場に付け！」

目暮警部の号令の元、警官たちは会場内に散って行った。その直後に控室のドアが開き、ヨーコが顔を出す。

「あの、よろしいでしょうか？」

「ああ、申し訳ありませんでした。どうぞ始めてください」
そしてヨーコはステージに向かっていった。

「…それじゃ、オレは行くからな」

「うん」

そう、これから小五郎は目暮警部の許可を得て、警備に関しての打ち合わせに出席することになったのだ。

「…お前たちはその間リハーサルでも見ている」

「大丈夫なの？」

蘭が聞く。

「ああ、そのことなら大丈夫じゃよ。ワシの方からスタッフや警官に話しておいたから、心配せんでもいいよ」

目暮警部が言う。そう、さすがに小五郎でも蘭やコナンを同席させるわけにはいかなかったのだ。その替わり、と言ってはなんだが、リハーサルを見せてくれる、と言うことになったようだ。

「…済みません。さ、コナン君行こう」

「うん」

＊

そしてコナンたちが館内に入ると、沖野ヨーコがリハーサルで歌っている最中だった。

すぐそばの空いている席に二人は座る。

（さて、と…）

蘭はじつとステージ上のヨーコを見ているが、コナンはあたりを見回す。

（…このコンサートには1万人来ると言っていたな。果たして一体犯人はどうやってここから彼女を狙おうというんだ？）

確かに方法としてはいくつもあるだろう。しかし1万人もの人間が入っているいわば密室の中でどうやって彼女を狙うというのだろうか？

そんなことを考えていると、

「…やっぱり気になっているのかな」

不意に蘭がつぶやいた。

「気になっている、って？」

その言葉に気がついたコナンが聞き返す。

「なんかヨーコさん、どこか歌っている姿も上の空なのよね。やっぱりあの事件が気になっているのかな…」

「…そうだよな。誰だってあんな手紙が来た後じゃ気になって仕方がないよ」

「…何も起こらなければいいけれど…」

そしてしばらく経った後だった。

「…よし、あとは本番だね」

どうやらヨーコのリハーサルが終わったようだ。

「ありがとうございました」

ヨーコはバックバンドやスタッフに一例をすると本番に備えて舞台袖に消えていった。

彼女は彼女なりに精いっぱい笑顔スタッフに見せてはいるのだが、やはりその表情もどこことなくぎこちなかった。

それから2、3分経って小五郎が二人のもとに来た。

「…おい、そろそろ客入れ始めるだよ」

「わかったわ。行こう、コナン君」

「うん」

そして3人が館外に出ると、そこに目暮警部が立っていた。

「…いよいよか」

「警部、ヨーコちゃんのこと、私からもお願いしますよ」

「それはわかっておる。…それで、毛利くん、君たちはどこにいる

んじゃ？」

「ええ。会場全体が見渡せるように、という事で二階席を取ってもらいました」

「よしわかった。何かあったらすぐに呼ぶからな」

「お願いします」

そして小五郎たちはその場を離れた。

（第4話に続く）

・第3話（後書き）

作者より）この作品に対する感想等がありましたら「ともゆきのホームページ」BBS（<http://www.e.biglobe.ne.jp/~t-azuma/bbs-chui.htm>）の方
にお願いします。

・第4話

夕方5時を回ったころ。

「：それじゃ、お客さんを入れてください」

武闘館の玄関にいるスタッフに目暮警部が話しかける。

「わかりました」

そしてスタッフが武闘館の数か所の入り口に散った。

「毛利さん」

山岸が小五郎を呼ぶ。

「なんですか？」

「：お客さんの入場が終わるまで、こちらに来ていただけませんか？」

そう言う山岸は「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた紙が貼ってある部屋に招き入れる。

部屋の中には数台のモニターと数名のスタッフ、そして目暮警部がいた。

「すまん、毛利君。君はあくまでも一般の観客と同じようにふるまってほしい、との事務所の社長に頼まれてな」

「社長が？」

「まあ、気を悪くしないでくれ。開演時刻の前には席に移っていい、と言っているからそれまでの間、ここで館内の様子を見ていてくれないか？」

「：仕方ありませんな」

そう言う小五郎は一台のモニターに目を向ける。

会場からまだ10分ほどしか経っていないというのに、すでに半分近い席が埋まっていた。

「：随分と早く入るんだなあ。確か座席は全席指定だろ？」

小五郎が言う。

「：そうなんですけれど、やはり早く席について落ち着きたいので

はないか、と思うのですが」

山岸が言う。と室内にかかっている時計を見て、

「…済みません、これから開演前の打ち合わせがありますので」

そして山岸は出て行った。それを見送った小五郎は、

「…警部、ところで」

「わかっておるよ。不審人物を見かけたらすぐに連絡をよこすように言っておるし、ここのスタッフにも協力をお願いしておる。我々としては考えうる限りの手を打っておるよ」

「それは済みませんなあ」

それから30分ほど過ぎ、武闘館内の座席はほとんど埋まっていた。

「…それじゃ警部、我々も」

「ああ。何かあったらすぐに近くの警官か警備員に連絡するのじゃぞ」

「わかっております。…行くぞ！」

そう言う和小五郎は蘭とコナンを連れ、部屋を出て行った。

そして3人はスタッフが用意した座席に着く。

確かに辺りを見回すと、制服姿の警備員の他に、小五郎も見覚えがある警官が私服姿で立っていた。

「…それにしても」

蘭がつぶやく。

「それにしても、どうした？」

「…あたしたちはヨーコさんの命が狙われているのがわかっているからいいけれど、これだけ警備員がいると、何も知らないファンが見たら何事か、と思うかもね。ロックコンサートなんかで興奮したファンが将棋倒しになってけが人が出た、なんて話を聞くけど、ヨーコさんは少なくともそんな人じゃないし…」

「まあ、そうかもしれんが、これだけ警備員がいると犯人も迂闊に

手が出せねえんじゃないのか？」

「じゃあ…」

「ああ。どこにいるかわからねえが、間違はなくヨーコちゃんの命を狙っているヤツはもう会場に入っているはずさ」

(…確かにオレもそう思うな。ただ…)

コナンは武闘館内の観客を見回す。

(1万人も来ているからな。これだけの人数がいるとなると、果たして全員に目が行くかどうかなんだよな…)

それに開演前、という事でまだ場内は明るい、確かにコンサートが始まると場内は暗くなってしまうはずだから、よけい目がいいのではないだろうか？

と、そんなことを考えていると不意に場内が暗くなり始めた。

(…始まるのか？)

コナンがそう思った間もなく、ステージ上の電飾が輝きだし、バックバンドが演奏を始めた。

ほどなくスポットライトがステージに立ったヨーコにあたる。場内から大きな歓声が挙がった。

「ヨーコちゃん、待ってたよー！」

小五郎も歓声を挙げる。

「みなさん、こんばんはー！今日は楽しんでいてくださいねー！」

ヨーコが場内に向かって呼びかけると、歓声が返ってきた。

そしてヨーコは1曲目を歌いだした。

ヨーコの姿はステージの後方に設けられたスクリーンにも映し出され、彼女の歌っている様子が2階席や3階席の観客にもわかるようになっていた。

その映像を見ながらコナンは、

(…やっぱりちょっと硬い表情をしているな…)

そう、やはりこのコンサート会場で自分の命を何者かが狙っている、と知っているからだろうか、どこことなく笑顔もぎこちないものになっていったのだった。

そんなことを気にしながらコナンは、

「ねえ、おじさん」

と小五郎に話しかけたが、小五郎はすっかりステージの上のヨーコに夢中のようなのだ。

（…ははは、ダメだ、こりゃ）

そしてコナンはステージのほうに目を向ける。

＊

そして何曲か歌い終え、会場内も徐々にヒートアップしたようで、会場内の誰もがヨーコに注目している時だった。

男はゆっくりと自分の席をさりげなく、といった感じで離れた。

そして辺りを見回しながら慎重に廊下を歩いていく。

そして「使用禁止」と書かれた扉の前に立っていた。

勿論、彼が事前に貼っておいたものである。

彼は紙をはがすとそつと扉を開いた。

当然ながら中には誰もいない。

彼は懐中電灯の明かりを部屋の中に照らす。

その部屋の奥、目立たないところに大きな段ボールが所狭しと並べてあった。

そのダンボールが数多く置いてあれば、いくら警察でも一つ一つは中身を調べないだろう、と考えていたし、実際にそのようになったのだった。

彼はその中の一つに近づくと段ボールを開いた。

中にはゴルフバッグのようなものがあつた。

そして彼はゴルフバッグを開ける。

その中には黒光りするライフルが1丁あつた。

懐中電灯の明かりだけを頼りに彼はライフルのセッティングを進

めていく。ここに来るまでに何度も練習をしていたし、間違えることもなかった。

そして男は上着を脱ぐとそれを裏返す。

そう、その上着はリバーシブルになっていて、全く違う柄の服となったのだった。

そして体型をごまかすために、ゴルフバッグの中に一緒に入れてあったクッションを服の中に詰める。

さらに用意してあった帽子を目深にかぶり、サングラスをかける。そしてライフルの中に弾丸を込める。

そして男はあたりを見回しながら、そっと部屋を出て行った。

そして武闘館内の、ヨーコが見えなくなる位置にあたるためか、閉鎖されている二階席に向かって歩いて行った。

＊

「…いや、本当に今日もいっぱい来ていますね」

歌が終わり、ヨーコが客席を見回しながらトークを始めた。

それに合わせてか、小五郎が一休みしようと椅子に座った時だった。

「…ん？」

一瞬、何か光るものが目に入ったような気がしたのだ。

(…?)

そして小五郎は客席のほうを見ている。

武闘館の中はステージの上のヨーコに照明が集中しているからか、客席のほうは非常灯が点灯しているだけだったが、それでも暗闇の中で目が慣れたのか、結構場内を確認することができた。

(…何かの見間違いか?)

そう思ったが、もう一度、本当に一瞬だけだったが、何か客席から外れたところで何かが光った感じがしたのだ。

小五郎はその方向をじっと見る。

「：お父さん、どうしたの？」

さっきから小五郎がステージから外れた、客席のある一点を見ているのを見て蘭が聞く。

「：あそこに人がいないか？」

「え？」

「ほら、あそこに」

そう言っつて小五郎はステージの後ろ側にあたり、誰も観客がいな
いはずの客席を指さす。

「何かの見間違いない？ 誰もあそこには入れるはずがないじやない」

「いや、確かに何か光るモノを見たんだが：」

そう言いながら小五郎はもう一度その方向を見る。と、

「やっぱりそうだ、誰かいる！」

「え？」

「ほら、よく見てみる！」

そう言いながら小五郎はその方向を指さす。

「どこ？」

そう言いながら蘭が目凝らすと、隣のコナンが、

「おじさんの言うとおりで、誰かいるよ！」

「本当？」

そして蘭がもう一度目を凝らすと、誰かが動いたように見えた。

「：ほんとだ、誰かいるわ」

と、小五郎が、

「：アイツ、何持ってたんだ？」

「え？」

「ほら、なんか棒みたいなの持っているぞ！」

そして小五郎はじつとその方向を見る。

「：まさかあの棒が光ったのか？ だとしたら：、まさか！」

そう言うが早いか、小五郎は席を離れ、廊下に向かって駆け出していた。

「ちょ、ちよっと、お父さん！」

そう言いながら蘭とコナンも後を追いかける。

そして小五郎たちが廊下に出たときだった。

「：毛利さん、どうしたんですか？」

廊下に立っていた警官が小五郎を引き留めた。

「何者かがヨーコちゃんを狙っているんですよ！」

「なんですって？」

「しかもそいつがライフルか何かを持っているんですよ。おそらくそれでヨーコちゃんを…」

「なんですって？」

そしてその警官は近くにいた同僚の警官に、

「目暮警部を呼んできてくれ！」

そう叫ぶと、

「それで、どちらですか？」

「こっちです！」

そして小五郎たちは廊下を走り出した。

＊

「：それじゃ、次の曲、聞いてください」

ヨーコが言うのと前奏が始まった。

そんな様子を見ながら男はライフルを構える。

この大音響の中ではおそらく銃声も掻き消えるだろう。

そして男はスコープを覗き込む。

スコープの向こうには沖野ヨーコがいた。

（：ヨーコ、これでお前はオレだけのものになるんだ）

男はヨーコの左胸に照準を合わせる。

そして引金に指をかけた。

その時だった。

「…あの人だ！」

男の近くで子供の声が聞こえた。

＊

コナンたちの目の前にライフルを持った一人の男がいた。

「おい、お前、何をしている！」

小五郎が叫ぶ。

不意を突かれたか、男が小五郎たちのほうを向いた。

小五郎たちの姿に驚いた男はあわててライフルをコナンたちに向けた。

「…ようし！」

そして蘭がその男に向かおうとした時だった。

「待て、蘭！」

小五郎が叫んだ。

「どうしたの？」

「いくらお前の空手でも、相手がライフルじゃ勝ちようがないぞ。オレに任せろ！」

そう言うとき小五郎は男に向かって走り出していた。

男があわてて小五郎に向かってライフルを構えようとした時だった。

小五郎が素早く相手の胸元に飛び込むと右手でライフルの銃身を掴んだ、と思った瞬間、見事な一本背負いを決めていた。

次の瞬間、警官たちが男にとびかかり、あっという間に抑え込まれてしまった。

＊

不意にバックバンドの演奏が止まってしまった。

「…？」

演奏が止まってしまい、ヨーコがバックバンドのほうをさりげなく振り向く。

と、ステージにいたほとんど全員がある客席の方向を向いていた。ヨーコもつられてそっちの方を向く。

「…あれは？」

幸いにもその声はマイクには拾われていなかったようだ。

＊

男が手錠をかけられた。

その男の顔を見たコナンは、

「…この人は…」

「どうしたの、コナン君？」

蘭が聞く。

「…この人、光彦の家の近くのアパートに住んでいる人だよ」

「本当か？」

小五郎が聞く。

「うん」

「…お前、一体なんでこんなことを！」

小五郎が言うと目暮警部は、

「詳しい話は本庁の方で聞こう。連れて行け！」

そして目暮警部の命令で男が連れて行かれる。

＊

その様子を見ていたヨーコは周りの様子に気が付くと、あわてて観客に向かい、

「…ど、どうしたのかな？ 興奮しすぎちゃったのかしら？ はは

は、声援送ってくれるのはありがたいんだけど、あまり興奮しすぎちゃうのもね」

ヨーコがそう言うと会場から笑い声が起こった。

「…ごめんなさいね。途中で止めちゃって。それじゃもう一度最初から」

ヨーコがそう言うと、バックバンドも落ち着きを取り戻したか、再び前奏が流れ始めた。

（エピローグに続く）

・第4話（後書き）

（作者より）この作品に対する感想等がありましたら「ともゆきのホームページ」BBS（<http://www.e.biglobe.ne.jp/~t-azuma/bbs-chui.htm>）の方をお願いします。

・エピローグ

事件から数日後、円谷家の居間。

ハイビジョンテレビを前にコナンたち5人がソファに座っている。
と、

「今日はこれを見ましょうよ」

光彦が1枚のブルーレイディスクのケースを見せる。それは半年ほど前に劇場で公開されたアニメ映画のディスクだった。

「…そう言えばこのアニメ、ヨーコちゃんが声で出てるんだよね？」
元太が言う。

「そう言えばそうでしたね。『沖野ヨーコ声優初挑戦』ってことで話題になりましたよね」

光彦が言う。

「ねえねえ、早く見よう」

歩美が言う。と光彦が、

「あ、ちよつと待っててくださいね」

そして光彦はプレーヤーにディスクをセットすると、リモコンのボタンを押す。

＊

映画が始まってしばらくの間、5人は画面を見ながら雑談を交わしていた。

と、ちようどヨーコが声を当てている場面になった。

「自分も子供の頃にアニメを見て育ったので声優を一度やってみたかった」と雑誌のインタビューで話していたヨーコだったが、やはり、と言うかなんというかタイミングや声の出し方が、他のプロの声優と比べると若干浮いているように思える。

(…やっぱりプロの声優、ってのは違うんだな…)

コナンがそんなことを考えていた時だった。

「…そう言えば…」

歩美がつぶやく。

「どうしたの、吉田さん？」

灰原が聞く。

「この間、ヨーコちゃんのコンサートで、彼女をライフルで撃とうとしたって事件、あったでしょ？」

「ああ、そう言えばそんなのあったわね」

「：あれ、確かこの間光彦が話していた、アパートの住人の兄ちゃんが犯人だったんだろ？」

「ええ、そのようですね。ボクもその話を聞いたとき、びっくりしましたよ」

「：でもその人、なんであんなことしたんだろう？」

「ヨーコちゃんが好きだったかららしいよ」

コナンが言うと、思わず「え？」という顔をする元太たち。あの灰原ですら「ちよつと意外」と言う顔である。

「ヨーコちゃんが：、好きだった？」

「どういことですか？」

「その犯人の男は彼女が好きでしょうがなかったんだよ。それで、彼女を自分だけのものにしたい、って思っていたんだ」

「自分だけのものにしたい、って：」

「それで、彼女のブログなんかもまめにチェックしていたし、スケジュールも前もって調べておいてコンサートなんかにもよく行っていたらしいんだ。でも、そうしているうちにだんだんと気持ちに変化が出始めたらしいんだ」

「変化、ってなんですか？」

「彼女を自分の手にかけることで自分一人のものにできる、って思うようになったらしいんだよ。彼女をもっとも愛しているのは自分だ、愛するが故に自分一人だけのものにしたい。それで、自分のものにするためには自分の手で殺してしまう、そう極端が考えになっちゃった、ってわけだよ。：ま、これはあくまでも本人が警察の取り調べで言っていることだから本当かどうかかわからないけどな」

「：結局、彼女に対する歪んだ愛情がああいう結果を招いてしまったのね」

灰原が言うと光彦が、

「そんな人にはなりたくないですね」

その言葉に他の3人もうなずくのだった。

＊

そしてコナンが事務所に戻ってしばらく経った時だった。

「：ごめん下さーい」

家電量販店の作業着を着た二人の店員が、探偵事務所の上の小五郎たちの家に大きな段ボールを持ってやってきた。

蘭がドアを開けて出迎える。

「あ、ご苦勞様です。こちらです」

そう言うのと蘭は店員を居間に案内する。

そして店員は段ボールの中から大画面の液晶テレビを取り出すとセッティングを始めた。

その様子を見ながらコナンは、

（：ああ、そう言えば今日だったか）

そう、小五郎はヨーコの事件で貰った探偵料を使い、家用と事務所用の2台のテレビを地デジ対応の液晶テレビに買い替え、それが今日届いた、と言うわけである。

しばらく経って、店員がセッティングの状態を確認すると、

「それじゃ失礼します。：あ、今までのテレビは持って行きますので」

「ええ、お願いします。それじゃありがとうございました」

蘭の言葉に送られて店員が出ていくと、ほどなく外の階段を昇ってくる音がし、小五郎が現れた。

「：お、終わったか」

そう、小五郎は今まで事務所の方のセッティングを確認したのだった。

そして小五郎はテレビの前に座ると、

「それじゃ早速」

そう言う和小五郎がテレビのリモコンのスイッチを入れた。
ほどなく画面が映し出された。

「おゝ、やっぱり大画面で見る地デジは違うな！」

そう言いながら小五郎はリモコンの操作をしばらくしていたが、
一通りを終えると満足そうにスイッチを切る。

「そう言えば明日ヨコちゃんが出演する番組があるんだよな。今
から大画面でヨコちゃんを見るのが楽しみだぜ」

（：ハハハ。今度はおっちゃんがあ的事件の犯人みたくならなければいいけどな）

（おわり）

・エピローグ（後書き）

（作者より）

こんにちは、ともゆきです。

先の「東日本大震災」に関するドタバタ（私の住んでいる茨城県もあまり報道されませんが相当な被害がありましたので）もあって、ここまで完成が遅れてしまいました。何とか完成にこぎつけました。

この事件の犯人像はあくまでも私こと「ともゆき」が勝手な想像で、極端な例として考えた犯人ですので、実際にこんな「愛するが故に自分の好きなアイドルを殺してしまおう」なんて考える馬鹿はいないと思いますし、少なくとも私はそう信じています。

やはり好きなアイドルはそのアイドルを好きな人ひとりひとりのものだと思いますから。

それでは。

また、この作品に対する感想等がありましたら「ともゆきのホームページ」<http://www5.biglobe.ne.jp/~t-azuma/bbs-chui.htm>の方
にお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8750/>

愛するが故に

2011年8月29日17時14分発行